

住む

特集

古い家に、 暮らすとき。

懐かしい海辺の家。

築50年の借家を、改造して住み継ぐ人々。

ありふれた中古住宅を素にしてから、愉しむ。

小さな庭と家

緑とともに、新しい家へ引っ越す。

軒先から始まる、まちの緑化。

子規庵の庭で。

特別企画／パリ、下町暮らし。

selection／洗濯道具

連載／大橋歩 長田弘

原研哉 松山巖



懐かしい 海辺の家

夏が好きで、素足が好きな高田喜佐さんは、週末を海辺で暮らしたいとずっと長い間願っていた。そして見つけたのは、すだれや、風鈴や、蚊取り線香の似合う日本の夏の家。

葉山の漁師町のなかにひっそりと建つ、こぢんまりとした木造の平屋。

今から15年ほど前、不便を承知で買った古家に喜佐さんは、

手を加えず、子供の頃に戻っていくような、

そのままの懐かしさの中で暮らしたいと思った。

写真・小泉佳春 文・堀口博子



右・玄関から続く路地の向こうに、キラキラと光る海が見える。
左・2週間ぶりの葉山、木綿のきものとゴム草履でくつろぐ。



高

田喜佐さんの葉山の家を訪ねた。都心から高速を使えば1時間足らず。逗子、鎌倉まではわずかな距離のところにある小さな漁村、鏡掬海岸のそばに家は

ある。台風で海が大シケの日には、釣り船を陸にあげられるようこの辺りではどこも、海へと続く路地は海岸へ向かってまっすぐに伸びている。喜佐さんの家は、その道

沿い、海岸からほんの30メートルのところに建つ古い木造家だ。周囲はマンションや外国風の新興住宅群が年々迫る勢いのなかで、ひっそりとよき時代の葉山の面影を

残している。かれこれ15年前になる、縁あって手に入れた念願の葉山の家だった。自社ブランドKISSAのシリーズデザイナーとして忙しい毎日

右・リビングの椅子は友人から譲ってもらったという試作品や中古品。
左・母、高田敏子さんが愛用していたという、小さなちゃぶ台。

この家に

新品は似合わない。

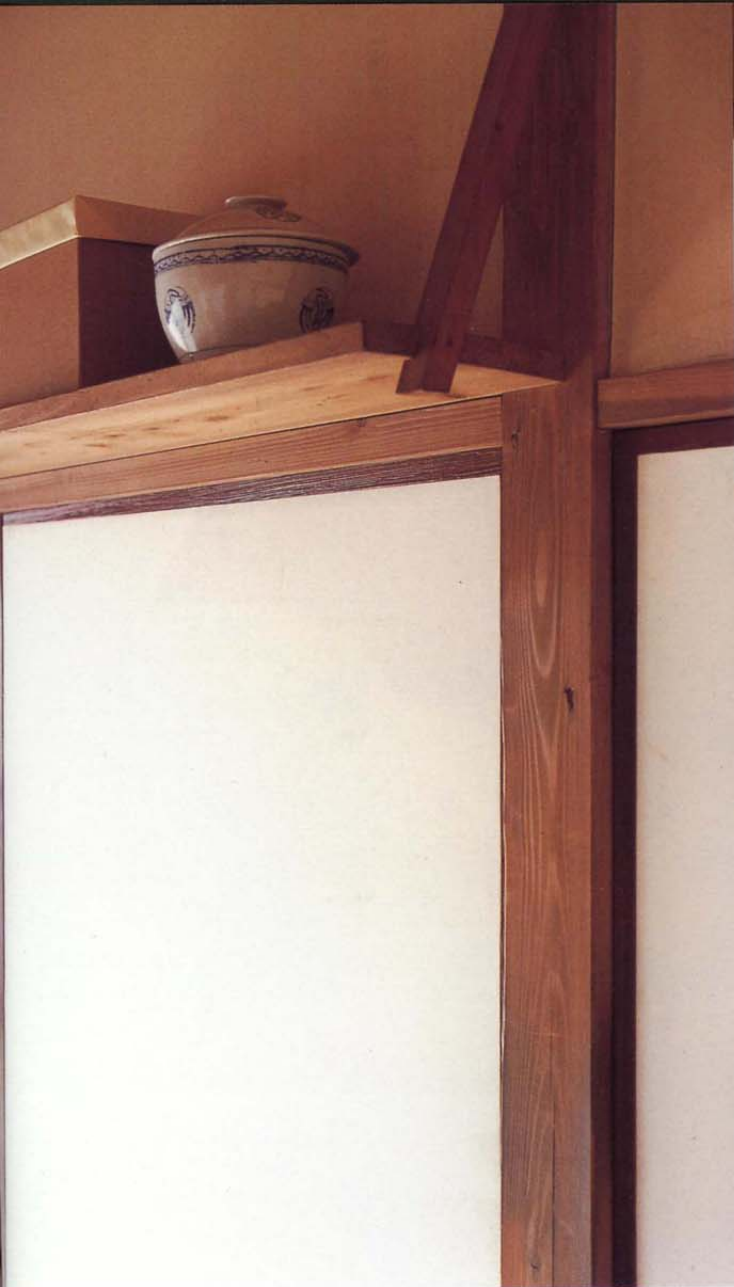
使い古しばかり。

ずっと前からそこに

あったような。







2 1

雨戸もガラス戸も
ガタガタだけど、
すべてが懐かしい。
ほっと落ち着く。



4



3



6 5

- 1・鴨居にきものを掛け、風を入れる。縁側のある前庭から裏庭を見通す。
- 2・古い住まいは物入れが少ないのが悩みの種。簡素ながら丁寧なつくりの吊り棚。
- 3・「古家は戸の開け閉めでも、うまくやらないとすぐはずれる」。
- 4・障子の穴塞ぎが結構楽しいのよ、と喜佐さん。
- 5・古家の掃除はいたってシンプル。帯にハタキに雑巾がけ。
- 6・この春に新調した青い竹垣を背景に、海岸で拾った貝や石が並ぶ。

をおくる高田喜佐さんは、東京南青山のマンションに住んでいる。40代のある時、週末を過ごす海辺の一軒家を探しはじめる。

「自分らしくシンプルに生きたい」と考えるようになった頃だったと話す。中でも鏡掇海岸は父親の会社の寮があった所だけに、家族と過ごした思い出がいっぱいつまっている。

「海で泳いで水着のまま帰れる、できれば古い木造の家」を思い描いていた。

「母が大手術をして、退院したら一緒に住もうと思っていました」。母とは、詩人の高田敏子さん。

「会えば喧嘩ばかりしていた母娘ですが、海のそばならうまくやっていけそうな気がしてね。でもその時にはどうしても希望するような海辺の一軒家は見つからなくて、結局は間に合わず母は他界してしまった」。

それから1年後、運良くこの家と出会うことになった。

「うれしくて、うれしくて、ずっと住みたかった海のそばの家ですものね。母も海が好きだった。泳ぎの上手い人でした。今もこうして海を眺めていると、向こうの岩の上で母が笑いながら手を振っているように思えるんです。この家は天上の母からの贈り物ですね」。

戦

後間もなく建てられたという40坪ほどの平屋は、釣



21

近所の大工さんや
植木屋さん。
長いおつき合いを
しながら、
古家を守ってきた。



6



5



4



3



87

- 1・電気スイッチのパネルは金属製。60年前に付けられたままだ。
- 2・幅50センチほどの小さな洗面台も、棚を設けて、そのまま使っている。「顔洗う度に水が飛び散るのよ」と笑う。
- 3・縁先の小さな庭が古家に情緒を添える。間もなく紫陽花が花をつける。
- 4・この海の家で夏を過ごした子供たちの描いた絵やポストカードが壁に並ぶ。
- 5・お風呂場の木製建具。
- 6・格子戸は地元の古道具屋さんで見つけた掘り出し物。寸法はぴたりと合う。
- 7・書斎の鏡台はお隣りからの、揺り椅子は母の友人からのいただき物。
- 8・波音に江戸風鈴が頃合よく鳴る。木製の竿通しは、大工さんに付けてもらったという。

船屋のおじさんに聞いた話によると、薪や石炭が風呂燃料の時代に風呂釜掃除をしていた人の家だったそうだ。田の字間取りの座敷に、台所、風呂、トイレが並ぶ。縁側に立つと潮風が香る。開け放った窓から窓へと風が抜けてなんとも気持ちがいい。瓦屋根に外壁は杉板、内は土壁、そして畳と木の廊下、建具は昔のままの木製建具を先代から受け継ぎ使っている。とうに60年は過ぎていくから、不便は多々あるはずだ。その不便さをこらえてこそ得られる、古家に住む快感を喜佐さんは知っている。そして味わっている。

「雨戸もガラス戸もガタガタ。台所は狭いし、冬は透き間風が入って寒いし。だけど、すべてが懐かしく、ほっと落ち着く。」

ごろりと畳に寝転んだときに目に入るもの、肌に触るもの、潮の匂い、波の音、すべてがやさしいのだ。無理のない、簡素な暮らしが実に喜佐さんらしい。

「ここではあまり物を置かずに、必要なもので暮らすように心がけているんですね。」

部屋を飾るのは浜で摘んだ花や、散歩の途中で拾った貝殻や小石や流木、ふと心動かされたものとの出会いがさり気なく配置されている。家具も新しいものではなく、実家や友人からのもらいものだ。「この家には新しいものは似合わない」

いみたい。前からそこにあつたように暮らしたかった」。そう言いながら指差す書斎の一隅に、大きな鏡台が据えてある。

「お隣りのおばあちゃまが、おじいさんが亡くなった時に私にくださったものなのよ。髪結いさんだったおばあちゃまの、商売道具の鏡台」。その鏡の前で、ご近所のわたしの髪をいくつも結び上げていたのだろう。そんな古きよき時代の匂いを残す物を喜佐さんは大事にしている。

夏

支度のすだれが間を仕切る。すだれ越しに見る小庭の風景が目には涼しい。贅沢な材料などひとつもない、かつて私達の生活の身近にあった杉や竹、土、紙、布、草でつくられた合理的で機能的な昭和のつましい家。今となつては探すのも難しい貴重な葉山

1・小体な木造の平屋。よき時代の葉山の面影を残している。

2・靴と下駄が並ぶ日本の家の玄関。「ずっと変わらないうでほしい風景よね」。

3・海までほんの30メートル。水着のまま家へ帰れるのが喜佐さんの家探しの条件だった。

4・家族と過ごした思い出の葉山。「田舎のない私にとって海へ行くことは何よりうれしい出来事だった」。

5・「東京を離れ、自然と触れ合う瞬間が何ともいえず気持ちいい」。



1



2



3

の一軒家だ。

「最初はね、建て替える予定だった。海が見える二階建てに。でもなんかとりあえず住んでみたらよかったんですね、平屋というのも気に入ってね。できるだけ手を入れず、あった通りのまま住んでみたいと思ったの。直したのはトイレを水洗にしたぐらいね」。

とは言うものの、古家に住むには日頃の修繕は欠かせない。ご近所の大工さんや植木屋さんと長いおつき合いをしながら、家の普請を預かってもらってきた。潮風で傷みやすい板壁を3年に一回ちゃんと塗って補修してきたのも、出入りの大工さんの助言があつたらだった。

「植木屋さんにこの春、竹垣を新しくつくってもらったのよ。去年の台風で壊れちゃってね。きれい

でしょ、青くて清々しい。今は息子さんの代になって、これからもずっとがんばって欲しいわよねえ。町から職人さんがいなくなるのは寂しいもの」。

履き心地にこだわるKISSAの靴は、職人さんの熟練した技があっけはじめて生まれる。だから外国生産で安くつくれるという誘いも断って、日本の職人技を守りたいと頑なにがんばってきた。そんな喜佐さんの思い入れは、自ずと家にも向けられる。網戸にもこだわり、木枠のものを建具屋さんに特注したので思いのほか高いものについてしまったそうだが、「やっぱりアルミサッシにはできなかった」という。

デ ニムのような木綿のきものに、バリ更紗の半幅帯をきりりとしめて、海辺までの坂道をいなせに歩く喜佐さん。江戸っ子の風情が身に付いている。足とのゴム草履は、葉山の暮らしの必需品だ。初夏の海の感触を確かめるように、波打ち際を歩き、水の中へざぶざぶはいってゆく。

「私、裸足が好きだから。途中でゴム草履を脱いで、隣の海岸の森戸神社まで裸足で行って帰ってくるんです。それがすごくうれいすよね。海を見ていると嫌なことなんて忘れちゃいますよ」。

散歩に出れば、近所の顔見知りの漁師さんと立ち話に花が咲く。

散歩に出れば、
浜で漁師さんと立ち話。
ここには普通の暮らしがある。



4



5

採れたての魚やひじきをわけてもらうこともよくあるそうだ。
「いただいたお魚を台所でコトコト煮たりする。楽しいですよ、そうゆう時間が」。うれしそうにそ
う話す喜佐さんは、この15年間、
東京で用事がない限りほとんど毎
週末この家で過ごしている。
帰ったら、まず雨戸をいっせいに
開け放つ。鴨居や障子に溜まった
埃をバタバタ、ハタキではらい、
畳の目に沿って箒でシュッシュッ
と掃き出す。最後は、堅く絞った
雑巾でキュッキュッと拭き上げる。
古家を磨くいたってシンプルなの
掃除法を、喜佐さんはこの他
気に入っている。

近著『暮らしに生かす江戸の粋』
の中でも、葉山の家の掃除につい
て、「箒とハタキと雑巾の控えめな
日本の掃除道具を見直したい」と
綴っている。「電気掃除機のあの音
と長い電気コードがどうしても好
きになれない」と。

さて、一週間ぶりにさっぱりと
風の通ったわが家を見回し、喜佐
さんはきつとこんな風に過ごして
いることだろう。……大学時代か
ら愛好するショートホープをおい
しそうに燻らし、おそろく冷たい
ビールを片手に縁側越しの海を眺
めている、ゆるやかに流れるオー
ルドハワイアンソングを背景にし
ながら。そんな何でもない暮らし
を楽しんでいるに違いない。